

2級 【シーチング組み立て】傾向と対策

<地直し・布目>

- ・持参したシーチングが厚すぎたり薄すぎたり、糊のききすぎたもの・腰のなさすぎるものなど、ジャケットのシーチング組み立てに適さないものを使用したため、シーチングの仕上がりがうまくいかず減点されることが多いので、標準的なシーチングを購入し使用することが望ましい。
- ・シーチングの地直しは最低縦方向、横方向の2本の基準となる線がないと正確におこなうことが難しいと思われる。地の目通りに線を入れ、縦横が直角になるようにアイロンをかける。シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出ないこともあるので、試験以前の課題として適切なシーチングを正確に地直ししてしわの出ないように持参するよう心掛けていただきたい。
- ・シーチングにパターンを描き写す方法として、パターンの上にシーチングをのせてトレースする方法が一般的であるが、パターンとシーチングの地の目を完全に合わせて、必要な個所にプッシュピンや文鎮で固定して正確にトレースする必要がある。トレース時シーチングに入れた基準となる線以外にも必要な基準線を忘れずに写しとることを心掛けていただきたい。

<身頃>

- ・今回のデザインは4面構成のパネルラインということで、バストダーツはパネルラインでイセて処理、後ろ肩ダーツもイセて処理するのが正解となるが、パネルラインの位置がバストトップから離れ過ぎたり、原型操作の段階でダーツ量の分散が正しく行われていないとイセ分量が多く残り、きれいにシルエットが表せない。
- ・シーチングに写したパターン線に対して、正確に縫い代を記入した後に裁断することが望ましい。部分的に縫い代幅が極端に狭くなったり広がったりしてシルエットや見栄えに影響しているものが見られた。ジャケットの切り替え線は1cm前後の一定の縫い代幅を付けた状態で、切り込みを入れなくても収まる程度のカーブ線が縫いやすく、美しい仕上がりが期待できるので、縫い代幅は正確に（裾・袖口は3～4cm、他は1cm程度）裁断して、アイロン処理することで実物の仕上がりに近いシルエットを出すことが可能と思われる。
- ・シーチングのピン打ちは決められた方法があるわけではないが、不正確なピン打ちでシルエットを崩すことは避けたい。一般的にシーチングのダーツ線や縫い目線は、どちらか一方を折って重ね、片倒しの状態にとめることが多いが、上に乗る側のシーチングの折りにピンを刺し、下のシーチングを少量（1mm程度）すくってピン先を斜め上に出す方法が、ピンのあたりが少なくきれいな仕上がりになる。縫い目線に対しての方向は斜め・直角・平行など、止める角度に正解があるわけではないが、ピンを止めたことによってシーチングのシルエットを崩している場合は減点の対象になる。
- ・シーチングの縫い代を片倒しの状態にピン打ちする場合、どちら側を上に乗せるかについても正解があるわけではなく、結果としてシーチングが美しく表現されていればよい。一般的には片返し処理をして縫製するときと同じ方向に倒す。
- ・ジャケットに限らずだが前端や裾は出来上がりに折り、縫い代が出てこないようある程度ピンで止める。折られていなければ未完成として不合格になるので注意する。
- ・組み立てたジャケットをボディに着せ付けする場合、前中心・後ろ中心を合わせ、シーチングが着崩れないように、必要な個所にピン打ちをする。ボディの肩にかけているだけのトワルは完成していないとみなされる場合があるので注意する。
- ・後ろ中心の始末は模範解答のように左身頃の出来上がり線も写し伏せて縫い目として表現することが望ましい。

<ボタン（身頃）>

- ・ボタン位置とバランスはよくできていたと思われるが、まれにボタンの数の間違いや大きすぎるもの、小さすぎるものもあった。
- ・配点の対象ではないが、ボタンホールも記入し実物縫製した時の雰囲気表現できるようにしていただきたい。

<ポケット>

- ・今回はフラップ付き片玉縁ポケットになる。組み立ての場合、玉縁は表面から見えないので付ける必要がない。勘違いをしてフラップの上に付けているものもあった。
- ・フラップの外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、フラップの形状を安定させるためにも縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで身頃に付ける。カーブの場合縫い代にぐし縫いを入れるなど、きれいなカーブになるよう工夫が必要である。
- ・身頃にもポケットつけ位置を正確に写し、設定通りの位置にポケットが付くようにする。

<衿・衿付け>

- ・衿の地の目はたて地、バイヤス地どちらでもよいとされているが、地直しをしっかりとし、ゆがみがないうよう組み立てていただきたい。
- ・衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、特別な場合（微妙なカーブ線や形状の場合）以外は裁ち切りにしないで、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで、ピン打ちはしないほうが望ましい。衿付け線のピン打ちは、縫い代を折って縫い目線の際を衿付け線に沿って平行に止めるべきである。
- ・今回は切り替えのあるショールカラーであるため、切り替えを端までしっかりとピンで止め、切り替えを止めてから外回りの縫い代を上衿と続けて折り、外回りがきれいにつながるようにする。

<袖・袖付け>

- ・袖を組み立てる段階で、肘のくせを表現するためにはくせ取りが必要である。くせ取りがされておらず袖の形状が悪いものが多くあった。
- ・袖口の明きみせの始末も不備（明かないもの、エッジ始末の不良）があるものがある。事前に確認して試験に臨んでいただきたい。
- ・肩パットが縫い代端まで届いていないもの、前後片方に偏って付いているものは安定した状態で袖付けがされず、見栄えが悪いものが見られた。肩パットはアームホールの縫い代に端から端までがしっかりと掛かるように設定し、はみ出した余分な部分はカットする必要がある。
- ・袖付けのピン打ちは、縫い目線の際を袖付け線に沿って平行に止めるが、ピン打ちの不備のために袖のシルエットを崩してしまったものが多かった。ピン打ちでイセの表現ができない場合、ぐし縫いをするなど袖山の形状をある程度セットしてから付けるなど工夫が必要ではないかと思われる。
- ・袖を素早く、安定して付けるにはパターン上でイセの配分をし、合い印を入れておく。それを身頃・袖のトワルに確実に写し組立てる必要がある。
- ・袖は体型上振りが必要である。作図の段階で振りが表現されているのはもちろんだが、袖を付ける段階でも袖が振れているよう付けなければならない。事前に練習が必要である。